

平和への祈り

～大戦の実情 後編～

1941年（昭和16年）12月の開戦以来、日本軍は勝利の進撃を続けていましたが、国民の喜びもつかの間で戦局はかげりを見せ始めます。1942年8月に日本は、絶対国防圏（本土防衛・戦争維持のために死守しなければならない防衛ライン）を設定するも、それらの戦線は瞬く間に崩れていきました。そして日本軍は、迫りくるアメリカ軍を相手に悲惨な戦いを繰り返していきました。

【敗北への道】



（赤線は1942年の日本軍の戦線）

1. 戦局の転換1942年（昭和17年）

～南洋群島で日本軍の全滅地域が拡大し、アメリカの占領戦略は、ギルバート諸島⇒マーシャル諸島⇒トラック諸島⇒マリアナ諸島⇒日本本土の順に進められていきました。

●6月 ミッドウェー海戦①

この戦いを境にそれまでの日本軍優勢の戦局は逆転しました。

●8月～翌2月 ガダルカナル島攻防戦②

アメリカ軍は、ガダルカナル島の占領を皮切りに本格的な反撃作戦を始めました。

2. 戦線の崩壊

1943年（昭和18年）

●5月 アッツ島玉砕③

●11月 タワラ島・マキン島玉砕④

1944年（昭和19年）

●7月 サイパン島玉砕⑤

サイパン島陥落により、日本本土がB-29（戦略爆撃機）の爆撃可能範囲に入り、都市への空襲が始まりました。

●8月 グアム島玉砕⑥

*玉砕は全滅を意味しますが、「生き恥をさらさず、立派に戦い、潔く死んだ」という称賛の意味がこめられていました。アッツ島の悲劇を最初として新聞に頻繁に登場するようになりました。

●10月 フィリピンにて、初めての特攻⑦

特攻は特別攻撃の略称で、爆装し敵艦に体当たりしていきました。航空特攻と海上特攻がありました。

3. 最後の決戦へ1945年

●3月 硫黄島の戦い⑧

硫黄島の陥落により、B-29の中継基地が作られ本土爆撃にも護衛機がつくようになりました。

●4月～6月 沖縄の戦い⑨

壮絶な沖縄戦の犠牲者は住民だけで10万人と言われています。右は、沖縄に配属になった陸軍の軍人から届いたハガキ。右下は、沖縄戦により亡くなったことを告げる死亡告知書。（ハガキの差出人と死亡者は、同じ人物であり、先月号で紹介した外園克己氏です。告知書には、5月8日沖縄本島首里にて死亡したことが記されています。）



4. 終焉の時1945年8月

●8月 原爆投下

●8月 ポツダム宣言受諾

●9月 降伏文書に調印

～郷土の戦争・本土決戦の地と想定されていた郷土～

志布志湾は、本土決戦の地として想定され、1944年（昭和19年）の夏から迎撃のための軍事施設が志布志湾岸に構築され、大崎町内では、金丸・崎園・谷迫に陣地が敷かれていました。左下の写真は、西持留に残るトーチカ（コンクリート製の防御陣地）です。このトーチカは監視・通信用のトーチカです。右下の写真は、小能集落に積部隊（陸軍第16方面軍第57軍第86師団）が駐屯していたことを記念して造られました。



終戦から66年の月日がたち、今では日本が戦争していたことを知らない人々もいます。だからこそ今もっと、戦争があったという真実を語り伝えていく必要があります。

11月23日（水）のふれあいフェスタでは、29歳と25歳（上記の外園克己氏）という若さで戦死した兄弟を主人公とした特別企画展『平和への祈り～若者たちの遺品から～』を開催し、彼らが家族へ宛てた手紙・軍服・勲章などを展示します。戦争の時代を生きた人々が遺したものをとおして、平和の尊さを改めて感じませんか？

大崎町教育委員会

*主要参考文献『太平洋戦争』小林弘志著
『太平洋戦争』半藤一利著
『喜入町郷土誌』